

みやぎの多文化な人 宮城県内で活躍している海外出身者をご紹介します。

大郷町で働く外国人介護福祉士



ラー ティ ニャット レー さん
ベトナム社会主義共和国出身
社会福祉法人 善俊会 特別養護老人ホーム ウィング 勤務
長期・短期入居者部門



ツェリン サンドゥルプ さん
ブータン王国出身
ブータン王国出身
デイサービス部門



動画を楽しむ利用者さんと

—日本で介護の仕事をしようと思ったきっかけを教えてください。

レー ベトナムの首都ハノイから80kmほど北にあるタイ・グエン省にある大学で看護の勉強をしていたとき、日本で介護の仕事をしていた先輩から話を聞いて興味を持ち、介護福祉士を目指すことに決めました。

サンドゥルプ(以下 ウルプ) 父の仕事先の上司が日本人で、元々日本に興味がありました。ブータンの日本語学校で日本の介護福祉士の話聞いたのですが、母国には高齢者の介護施設がないので始めはピンときませんでした。でも、お年寄と話すのが好きだったので将来の選択肢のひとつだと考えて来日し、専門学校へ進むときに決めました。

—日本語学校から専門学校へ進学し、介護を2年間学んだそうですね。日本での留学生活はいかがでしたか。

ウルプ 来日前は母国で日本語を4か月勉強しました。ブータンでは英語で教育を受けます。日本も英語が浸透していると思っていましたが、街や商品に英語表記がないことに驚きました。来日後にそば屋へ入ったものの、文字も店員さんのことばもわからなくて注文できずに店から出たことがありました。それから常に日本語で考えて話すようにして習得しました。介護施設でアルバイトを始めた頃、昼間はとても温厚なのに夜は眠りたくない頑固になってしまう利用者さんを見て怖いと感じたことがありました。

レー 大学在学中に日本語を1年半勉強してから来日し、午前は日本語学校で勉強し、午後は介護施設で週の半分くらいアルバイトをしました。専門学校のかきは、勉強を最優先にして長期休みのときだけ施設で働きました。最初の頃は、私が利用者さんのことばを理解できず、利用者さんが話すのをあきらめてしまうことがあり、辛かったです。方言の「めんこい」や「なんぼ」などがわからなくて職場の人たちに意味を教えてくださいました。それも、ジェスチャーや表情からコミュニケーションをとることも大事だと学びま

した。それから、職場の人たちが、利用者さんがどんなことをしても、それを否定せず、最後まで話を聞いて受け入れていることに心を打たれました。また卒業後でしたが、施設からの了承を得て2週間の免許合宿へ行き、自動車の免許を取りました。宮城県の学科試験ではベトナム語があるようですが、私は日本語で受けました。

—介護福祉士の国家試験にはどのような勉強をして臨みましたか。

レー 国家試験で課せられる実務試験と筆記試験のうち、実務試験は学校で学んだので免除でしたが、筆記試験が1月末にあり、日本人と同じように受けました。勉強は、テキストの文字だけで暗記するのが難しかったのでYouTubeを見て覚えしました。介護に関する動画もたくさんあり、役に立ちました。でも、コロナ禍で授業がオンラインに変わり、閉じこもる日々になってしまいくじけそうでした。資格取得を目指したときの気持ちを思い出し、なんとか最後まで頑張ることができました。「合格圏内だよ」と先生に言われましたが、合格通知を見るまで落ち着かなかったです。

ウルプ 国家試験の合格率は日本人も含み全体で70%を超えていますが、私たち外国人には難しい試験です。筆記試験が全部記述式だったら、合格できなかったと思っています。漢字や作文など私の苦手分野を、先生方が丁寧にそして厳しく指導して伸ばしてくれたおかげだと感謝しています。工夫したことは、学校の授業時間に100%集中したこと、模擬試験を何度も繰り返したことです。

—試験に合格され、2022年の4月から正社員として働いていらっしゃいますが、この仕事の魅力はどんなところだと思いますか。

ウルプ 正社員となってから、自分が変わったと思います。穏やかな気持ちを保ち、社会人としてルールを守り、責任感を持って働くようになりました。仕事の魅力は、助けが必要な人に手を差し伸べられること。そしてその人の笑顔が見られることです。

レー この仕事の魅力は、利用者さんの笑顔を見られることだと思います。昔のことやご家族の話話を話してくれるのを聞くのが楽しいですし、日本のことも学べます。

「みやぎの多文化な人」の続き

—この仕事を続けるため大切にしていること、または将来の目標を教えてください。

レー 大切なのは、自分自身が健康であること。早番、日勤、遅番や夜勤など変則的なシフトで働くので、睡眠や食事など気を使っています。ベトナム人の同僚と畑で野菜を作って、母国の料理と一緒に味わっています。これからもここで働きますが、もっと先についてはまだ決めていません。

ウルプ ブータンで暮らしている妻と子どもと日本で一緒に暮らすために、留学の際の借金を早く返済したいです。そのためにも仕事の知識や技術の基盤をしっかりと固め、「この人の介護で間違いない」と任せてもらえるように頑張ります。

〈メモ:在留資格「介護」について〉

在留資格「介護」は、介護福祉士養成施設を卒業した留学生が介護に従事できるよう2019年に新たに創設されたもので、基本的に国家資格の介護福祉士を取得して、介護施設で働く外国人に付与されます。在留資格「技能実習」や「特定技能」を持つ外国人も介護職に就いていますが、在留資格「介護」は在留期間を延長して永続



母国を紹介中

的な就労が可能で、配偶者と子の帯同が認められています。

今回のお二人は、仙台市内の日本語学校に留学後、介護福祉士の養成施設(専門学校)で2年間勉強し、2022年1月に行われた国家試験に合格して介護福祉士の資格を取得しました。他にEPAや実務経験のルートから介護福祉士を目指す外国人もいます。

特別養護老人ホーム ウィングの方々からお話を聞きました 介護課 課長 安達 幸さん

彼らは明るく素直で利用者さんから人気があり、また仕事への取り組みが真面目で職員から信頼されています。初めの頃は日本の風習やルールについて理解してもらうことが難しく、納得してもらえるまで話し合ったこともありました。学習面では、本人たちの希望のもと、介護で必要なことばの使い方を覚えてもらうため、ヒヤリハット報告書(事故にはならずとも「ヒヤリとした」「ハットした」事例の報告書)を記入してもらい職員が添削するなどしました。現在は、母国の紹介あるいは食事を提供するなど、自ら発案や企画をして施設全体を活気づけています。今後はさらに経験を重ね、後輩を指導する立場としてより一層成長してくれることを期待しています。

外国人留学生指導員 藤村 由香さん

学習や就業時の移動、そしてそれぞれが自立して生活できるようサポートしてきました。交通の便が良くない場所にあるため、アルバイトで来ていたときは、個々の勤務に合わせた送迎が大変でした。卒業後の住居探し、引っ越し、在留資格変更などを手伝えるなか、自立してもらうため厳しく指導することもありましたが、このコロナ禍で制約の多い職務の彼女らが我慢強く働いている様子に頭が下がる思いです。



シリーズ 外国につながる子どもたちの支援について考える



第5回 外国人の子ども・サポートの会代表、MIA外国人児童生徒アドバイザー 田所 希衣子さん

今回は中学生で来日した生徒の学校の外での支援についてお話しします。「外国人の子ども・サポートの会」では社会人や学生が、日本語と教科の学習サポートをしています。サポーターに共通しているのは、子どもたちのためにできることをしたいという思いです。

小学生は母語を獲得する途中で来日しますが、中学生は母語で小学校の学習を積み、読み書きの力も身につけて来ます。ところが、ことばが全く通じない学校生活で、日本語がわからないと何もできない無力感や孤独感を感じることがあります。そんなとき、いつも声をかけてくれる先生や友達や支援者の存在は大きな支えになります。日本語で簡単なコミュニケーションがとれるようになるには半年、授業の教科の内容がわかるまでには1年半から2年かかります。

高校入試が目の前にありますが、中学生の学習サポートの目標は、入試だけでなくその先の高校に入学してから授業を受ける力をつけることだと考えています。習った日本語の母語訳を翻訳アプリで調べて自分用の「辞書」を作ったり、日本語表現をノートに整理したりして学習に役立つストラテジーを少しずつ身につけます。また、日本語学習のスタートと同時に小学校の算数の計算チェックをして抜けているところがないか確認します。九九や小数や分数などの計算が苦手な場合は早い段階で復習します。クラスの友達が日々教科学習を進めている中で、日本語を学びながら、母国での学習を途切れさせないで続ける工夫が必要です。そして日本語ができるようになったら、それまでよく理解できなかった1、2年生の教科の内容を復習することも大切です。

進学については、外国から来た家族のために毎年「日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス」があります。県内の支援団体、外国出身者が実行委員会のメンバーとなり多言語の情報を提供しています。家族で参加して進路について考える機会になります。

多文化なトピック

参加者募集！ 国際協力セミナー〈インドネシアと宮城の絆〉

JICA東北とMIAとの共催で毎年開催している国際協力セミナー。今年度はインドネシアがテーマです。

県内には、技能実習生や留学生など約1,200人のインドネシア人が暮らしていますが、この数は10年前の5倍以上となっています。また、日本とインドネシアには、ともに大きな自然災害を乗り越えてきた共通点もあり、防災・減災に関する経験や技術を共有してきた、というつながりもあります。

今回のセミナーは、仙台と気仙沼、そして、インドネシアをつなぎ、宮城とインドネシアの交流・協力・共生に関する取り組みを紹介しながら、両者の密接な関係のこれまでとこれからについて考えます。ぜひご参加ください。

■日時：2023年2月19日(日) 14:00～16:00

■会場：第一生命タワービル 11階会議室（仙台市青葉区一番町4-6-1）

■内容(予定)：

- ・インドネシアってどんな国?～知ることのできる私たちの絆～
- ・インドネシアと日本の国際協力～共にWinWin～
- ・小さな町の国際交流～気仙沼市鹿折地区から～
- ・インドネシアと宮城の絆への期待～宮城に暮らすインドネシア人から～

■主催：国際協力機構 東北センター(JICA東北)、宮城県国際化協会(MIA)

■お申し込み・お問い合わせ：JICA東北 市民参加協力課 thicjpp@jica.go.jp 022-223-4772



民族舞踊のパフォーマンスも予定しています

MIA日本語講座だより 第2期初級・中級クラスが閉講しました



今年度第2期のMIA初級1・2クラス(全55回)と中級クラス(全28回)は、12月15日が最後の授業日で無事に終了となりました。

初級クラスの閉講式では、各受講生がスピーチをし、参加したクラスのことや日本での生活についてなどを発表しました。9月の開講式では緊張した面持ちだった受講生が、この閉講式では時折笑顔を見せながらスピーチを披露し、この3か月間の学習の成果がしっかりと感じられました。ある受講生は「MIAの授業は、漢字や文法を学べるだけでなく、日本の風土や文化も学べる点が収穫でした」と話していました。

中級クラスは、初級と少し違う閉講式で、講師やMIAスタッフとおしゃべりの時間がメインでした。最後に受講生が考えてきたことや、おしゃべりで話したことを発表しました。発表の内容は、母国の気候の変化や地球温暖化に関すること、出身地の紹介、日本語を勉強して将来どうしたいかなど様々でした。授業を通して日本語で意見や考えを表現する力を磨いてきた成果が感じられる有意義な閉講式でした。



閉講式でスピーチをしている様子

外国人児童生徒サポーター研修会のご報告

宮城県内の小中学校や高校で学ぶ外国人児童生徒に対し日本語指導や学習支援を行う外国人児童生徒サポーターを対象とした研修会を去る12月にオンライン形式で開催し、サポーター16名が参加しました。

本事業のアドバイザーのおひとり、田村由香子さん(「倶楽部MIA」123号と124号にてコラムを寄稿いただきました)から「外国人児童生徒への日本語指導、学習支援の際に大切にしていること」についてご講演をいただいたあと、ブレイクアウトルームに分かれて、それぞれのサポーターの活動状況の報告や困っていることや難しいと感じていることについて話し合いました。実際にサポート活動をされている方は自分の活動をふりかえる機会となりましたし、これから活動を始める方においては現場の実際の様子を聞く機会となったようです。5名のアドバイザーにもご参加いただき、ブレイクアウトルームでの話し合いの際には様々な助言や情報提供もなされました。

昨年の水際対策の緩和を受け、来日する外国人が増加し、それに伴って子どもの小中学校等への編入も増加しています。日本語を母語としない子どもが日本の学校で学習を進めていくのは困難が伴いますし、学校側もその子どもの日本語力などに合わせた個別の対応が求められるため、外国人児童生徒サポーターは子どもと学校双方を支える役割を果たしていると言えます。

KIFAカフェに参加してきました

「KIFAカフェ」は、加美町国際交流協会(KIFA)が設けている、町内に暮らす外国人と日本人との交流の場です。

11月、12月のKIFAカフェに、MIA地域日本語教育コーディネーターの鈴木英子さんがお伺いして、参加者同士で日本語でのコミュニケーション活動を行って来ました。

日本人の参加者は、主に「日本語交流サポーター育成講座」に参加し、同講座で「やさしい日本語」や異文化間コミュニケーションについて学んできた方々で、KIFAカフェに実践の場として臨んだものです。

全員で自己紹介をしたあと、「ほしいもの」「行きたいところ」について、絵カードやワークシートを使いながら、全体で、またはグループやペアで楽しく話し、笑顔の絶えない時間となりました。

この取り組みは、「令和4年度地域日本語教育体制構築業務」(県委託事業・文化庁「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用)として実施しているもので、MIAでは今後もKIFAカフェのお手伝いをしたいと考えています。



ワークシートを使って楽しく会話をしました

みやぎの国際活動団体

蔵王町国際交流協会

蔵王町国際交流協会(Zao town International Association、略称ZAIA)は、国際相互理解と友好親善の促進を図ることを目的として、2007年4月に設立しました。ZAIAが発足してから今年で15年目になります。ZAIAは蔵王町の特性を生かした国際交流活動を推進しており、これまでに世界の料理教室、蔵王の秋を楽しむ会、国際理解教室など季節に合わせたプログラムを開催してきました。ここ2年は昨今の新型コロナウイルス感染症拡大により、以前より活動を縮小しておりますが、新たな事業として、在住外国人に乗馬等のスポーツ体験の機会を提供したほか、地元の高校生を茶道講師とした文化交流を行うことができました。どちらの事業でも子ども達が積極的に外国人参加者と交流をしていて、目的である青少年の国際教育の機会を提供できたと感じています。

コロナ禍を契機として、国際交流の現状は大きく変化しました。ZAIAでもオンライン交流など、時勢に合った国際交流活動を計画していきながら、地域の魅力、国際交流の魅力を発信していきたいと考えております。



地元の高校生と茶道を体験

サポーターの声

番外編 仲上 比呂子さん MIA日本語サポーター



仲上さん(中央)と
ミャンマー出身のティンさん(手前)、ウーさん(奥)

仙台市内の特別養護老人ホームせんじゅで働くベトナムとミャンマー出身の外国人技能実習生7名に介護の日本語、日本語能力試験N3対策などを教えています。私も介護士の勤務経験があり、例えば、利用者さんの着替えのときなど実際の体の向きや動きなどで使う日本語はジェスチャーを交え、コツも合わせて教えています。

シフトに合わせ1~2人ずつ教えているので、お互いを理解しやすいのが長所です。来た頃は黙って下を向いていた実習生から、笑顔で「ごっつおう? 何ですか?」など質問が出たりして、成長が見られるとうれしくなります。信頼関係を築いた後は、困りごとや体調など色々な話も気軽にできるようになります。

施設では、実習生担当のスタッフや通訳スタッフとのチームワークで支援できる体制になっていて、安心できる職場です。異なる文化や習慣の中で仕事をしながら日本語も学ぶ実習生に私ができることは、寄り添い丁寧に対応することです。それが彼女らの適応に繋がると考えています。

賛助会員募集

MIA(公財)宮城県国際化協会は、県民参加の幅広い国際交流を進め、人と人との輪を広げていくために、皆様の御理解と御協力を求めています。



- 賛助会員の資格
本協会の趣旨に賛同し、運営活動に協力していただける個人や団体(国際活動団体、企業、機関)など
- 賛助会員の区分と年会費
個人会員 / 1口 3,000円
団体会員 / 1口 10,000円
- 賛助会員の特典
◎ 協会機関紙「みやぎの国際情報誌 倶楽部MIA」の定期送付(年6回)

- ◎ 当協会主催のイベントや各種講座の案内及び参加費の減免
- ◎ 個人会員については協会と提携する旅行会社が指定する国内外の旅行代金の一部割引
宮交観光サービス(株)
- ◎ 企業会員については世界各国国旗の無償貸し出し、及び当協会の外国人スタッフ等による国際理解出前講座の無償提供
- 入会方法
◎ 本協会あて御連絡ください。
所定の申し込み用紙と振り込み用紙を送付いたします。



倶楽部 MIA vol.125

編集・発行
公益財団法人 宮城県国際化協会
〒981-0914
仙台市青葉区堤通雨宮町4番17号
宮城県仙台合同庁舎7階
TEL 022(275)3796
FAX 022(272)5063

E-mail mail@mia-miyagi.jp URL <https://mia-miyagi.jp>

